

自分大好きフランス人 ～ 寛容と個人主義の地 ～

実践女子学園の配慮と支援のおかげで、2015年に通称サバティカル休暇をえることができました。その言葉どおりフランス人からみれば長期休暇ですが、日本人には研修（修業）の機会ととらえるのが一般的です。当時、同世代の同業者も、同じような機会を得て渡航していることを考慮し、英国、ドイツ、デンマーク、米国、カナダ以外で受け入れ先を探しました。学生の就職活動に似た点は、履歴書を送りネットで口頭試問の面接を受けることです。先方の指定した時間が移動中であったり、授業・学会発表中であったり数々ハプニングがありました。複数の教育・研究機関から招聘状をいただくことができました（図1. Institut Supérieur de l'Aéronautique et de l'Espace）。



図1. フランスツールーズ市にある航空宇宙高等研究所の中庭にあるシンボル。

渡航前の1ヶ月以内に長期滞在用のビザ申請時に、現地での住所を明示する必要があり、いわゆる賃貸契約書を提出する必要がありました。こちらでもネットで英語対応してもらえない不動産業者を探し、何が書いてあるかわからない賃貸契約書を日本に送ってもらいました。現地での生活を考え、机、ベッドなど家具付きのアパートを探したのがとても懐かしく思えます。現地ツールーズ市に行けば、学



実践女子大学 教授 佐藤健
生活科学部生活環境学科人間工学研究室

生用アパート以外でも一軒家や集合住宅の中を改修した家具付きアパートがいっぱいありました（図2. アパート近隣風景）。



図2. アパート近隣のお気に入りの運河風景。



図3. 一人暮らしの朝食例。



図4. 夕食には、必ずワイン1本、ジャガイモは日本より安価で種類も多い。

渡仏しても、ヒトとしての生活は変わりません。3食すべて自炊する、朝ご飯(図3)、お弁当、晩ご飯(図4)、ゴミを捨てる(図5)、シャワーを浴びる、部屋の掃除をする、洗濯をする。洗濯機とオランダ製オーブンの使い方が怪しいだけで難なくこなせました。フランスでの外食も魅力的ですが、ファーストフードとレストランの中間の定食屋さんで一人で食事をする普段使いできそうなところがなかなか見つからない状況でした(図6)。



図5. 街角にある瓶回収ボックス。ワインやビールのボトルから蜂蜜やジャムなどの瓶は、回収ボックスに入れる。決められたボックスではなく出かけるついでにどのボックスに入れても構わない。



図6. 訪問者が来た場合に限り、外食。ミシェラン☆☆ Michel Sarran 氏と記念撮影。土日営業しないレストラン。

最初の1ヶ月でなんとなく困った点は、車がないため、水など重たい荷物を運ぶためにスーパーまで2往復する日があったことです。さらに、土日に近所のスーパーが営業しないため、金曜日にはスーパーが驚くほど混雑しました(図7)。スーパーの閉店が午後7時とすると、訪問先の研究所で午後4時半くらいになると、どんどん人がいなくなり午後5時には誰もいない働き方がまかり通ってしまう

のも納得です。また、日本でいうコンビニはなく、いつでも買い物ができる日本で生活の生活に比べて不便だと感じました。ある日曜日に、移民局からの呼び出し通知がいまかいまかと郵便ポストを覗いていました。アパートのオーナーがたまたま私を見かけ、「日曜日には郵便もフェデックスも UPS も来ないよ。」と言われました。そういえば、日曜日は、スーパーマーケットやカフェと地元のレストランも休業で、午前中だけパン屋さんがやっているだけです。日曜日は、皆が休む日であり、週休2日や有給休暇を必ず取得する国民性は日本とは比べものにならないくらい個人の権利が守られる社会である実感を得ました。



図7. 近所のスーパー。レジサービスは、椅子に座ったまま行う。レジ袋もない。

働き方改革が望まれている日本では、その名の通り働き方の多様性が先行し、生活そのものの多様性に対する意識がまだまだ発展途上と思われました。1899年に実践女学校が始まり、女子教育の先駆けとなったおよそ100年前に1789年に人権宣言をしたフランスでは、様々な生活場面で個人の権利が守られる社会が成立していると実感しました。休みの日に何かをしなければならないわけではなく、どこかへ行かなければならないわけではなく、学生さんは地域の図書館や公園で好きなように過ごしています。アルバイトに追われることもなく、オンとオフの切り替えを上手にやっているように見られました。